

海渡英祐

自選傑作短篇集

海渡英祐

自選傑作短篇集

読売新聞社

海渡英祐自選傑作短篇集 一九七六年九月一日 第一刷 定価九八〇円

著者／海渡英祐 ©Eisuke KAITO 1976 装幀／池田拓

編集人／酒井堅次 発行者／二宮信親

発行所／読売新聞社

〒一〇〇東京都千代田区大手町一―七―一 〒五三〇大阪市北区野崎町七七 〒八〇二北九州市小倉北区明和町一―一―一

印刷所／凸版印刷株式会社 製本所／ナシヨナル製本 0393―206470―8715
△落丁・乱丁本はおとりかえします▽

海渡英祐・自選傑作短篇集／目次

吉田警部補シリーズ
大喰らいの死体 7

加藤刑事シリーズ
仮面の告発 39

スパイ篇
謀略の背景 71

歴史篇
ミスタ・ヤマ 95

アリバイ篇
「わたくし」は犯人……

密室篇
免罪符 145

競馬篇
他山の石 171

サスペンス篇
脅迫の背景 193

クラシック篇
告発の輪舞 223

心理篇
ベッドの上のルフラン 251

犯人探し
天国の活人・問題篇 269

・解決篇 321

作家アルバム／ある日ある時 295

自作解説／私の推理小説作法 307

海渡英祐・自選傑作短篇集

大喰らいの死体

家々がせせこましく軒を並べた下町の通りを走って行く車の中で、警視庁捜査一課の吉田茂警部補は大いびきをかきながら居睡りをしていた。この男が現場へ向うときには、おっそろしく不機嫌な顔でわめき散らすか、それとも機嫌よく居睡りをしているか、まず二つに一つと相場が決まっている。

四月上旬の土曜日——ヘソマガリという点では誰にもひけはとらない吉田だが、大の寒がり屋だけに、やっぱり春の訪れは嬉しいらしく、不機嫌な顔をするわけにもいかないのであろう。しかも、春眠晩を覚えず、と言われる季節であれば、どうしても居睡りをする以外に手がないのが、論理的必然というものである。

「主任……主任……」

車が目的地に着いたので、同乗の佐藤部長刑事はおそるおそる吉田をゆり起した。仏頂面つきあうのもしんどいが、居睡りも後がいけない。眠りを妨げられると、彼はた

ちまち、歯痛に苦しむ閻魔大王みたいな形相に一変するのが常だからだ。

しかし、今日はどういう風の吹きまわしなのか、吉田はめずらしく、しごくおとなしく眼をさました。そして、ぼんやりあたりを見まわすと、ほっと溜息をついて、

「やれやれ、夢だったのか……」

「夢？ ははあ、何か悪い夢でも見ていたんですか？」

「いいというか悪いというか……どういいういきさつなのか、夢のことだからよくわからんが、おれは一人で、すばらしい御馳走を並べたテーブルに向っていたんだ。酒も、とびきり上等のやつがたっぷりあってな」

「へえ……そいつを食べようとしたら眼がさめた、つてのはよくある話ですが、どうもそうじゃないようですね」

部長刑事は首をひねった。そんな場合なら、吉田がおとなしくしているはずがない。夢の中の御馳走と酒をふいにした腹いせに、何故起した、と大いに憤慨するに決まっている。

「うん、食えなかったことはたしかだが……おれが箸をつけようとしたとたん、女房と子供たちがいきなりとびこんで来たんだ。ガキどもは『父ちゃん、ずるいや』とか何とか言っ、あつという間に御馳走を平らげっちまうし、女

房のやつは『あなた、隠れてこんな贅沢をするとは何ごとですか。今月の家計簿は赤字なんですよ』と、血相を変えて詰め寄って来やがる。おまけに、そこにあった酒をぐいぐいあおって、ますます威勢がよくなり、おそろしい権幕で……」

「ほう、主任のかみさん、いや奥さんはいける口なんですか？」

「いや、ふだんは飲まんのだが、そこが夢なんだな……あのまま夢がつづいたら、どんな目にあつたか……」

佐藤は思わずニヤリとした。心理学者でなくても、この夢を分析するのは簡単だ。

頑固で強情で、面がまえも同姓同名のかつてのワンマン首相にそっくりの吉田は——もともと人品に天地の差はあるが——傍若無人なことでは警視庁内でもずば抜けていて、上司なんぞは屁とも思っていない。しかし、この男もそういうものか、かみさんにはさっぱり頭が上らないのだ。おまけに、カアチャンとの共同作業から生れた七人の子供たちが、猛烈な勢いでスネをかじるので、彼はいつも飲み代にもことかく始末なのである。

「それは危いところでしたな。早く眼をさまざないと、夢の中とはいえ、主任が被害者になつていたかもしれません

よ……ただ、主任の夢は食い気ばかりで、さっぱり色気がありませんなあ。そばに、きれいどころをはべらせていたのなら、話はわかりますが……」

十一世團十郎ばりのマスクを誇り、フェミニストにして、かつ大のスケベである佐藤は、そんなことを言いながら、吉田をうながして車を降りた。

ここは葛飾区の柴又——渥美清の寅さんシリーズですっかり有名になったが、御存じ帝釈天からは半キロあまり離れているし、最近宅地化が進んで、附近の町のたたずまいに特に風情はない。事件が発生したのもふつうの住宅で、なかなか立派な構えの二階家である。ただ、それを取巻いた野次馬の群に、何となく下町のムードがただよっていた。

先着していた地元署の刑事の案内で、警部補たちの一行は家の中へ入った。現場は勝手口に近い六畳間で、切り炬燵が設けられているところといい、家具調度のたぐいといい、いかにも茶の間という言葉がぴったり来る部屋である。

上半分が飾り棚になった大きな整理箆の前、うつぶせに倒れている被害者をひとめ見ると、佐藤は思わず歎声を上げた。

「おやおや……主任、このホトケをかつぎ出すのは大仕事ですなあ」

まったくその通りで、被害者は小山のような巨体の持主だった。身長は一メートル八十あまりで、それだけなら、最近ではずばぬけた大男とは言えないだろうが、ビヤ樽みたいにふくれ上った胴体から、丸太のような手足が出ていて、百貫デブはオーバーとしても、百キロは軽く越えるに違いない。たぶん百二十キロから百三十キロぐらいの目方であろう。

吉田もずんぐりむっくりで、かなり下腹の突き出ているほうだが、このホトケにくらべればまるで大人と子供だ。としは四十前後という見当で、上物の背広を着こんでいるが、体つきはどう見ても、アンコ型の相撲取りといったところである。

死体のグローヴみたいな右手は、固く握りしめられ、前方へ投げ出されていたが、その拳^{こぶし}のそばには、いったいどういうわけなのか、人形が一つ転がっていた。長さ三十センチあまりで、かなり精巧な造りだが、ちょっと風変りな人形で、カウボーイ・ハットをかぶり、拳銃をかまえた、西部劇でおなじみのガンマンのスタイルなのである。女の子より男の子が喜びそうなものには違いないが、まさかこ

の巨漢が人形遊びをしていたとも思われず、何とも奇妙な取合せだった。

飾り棚の一箇所に空間があつて、そのそばのこけし人形などがひっくり返っているところを見ると、ガンマン人形も元々はそこに置かれていたものらしい。被害者が倒れるときに、はずみでそれを払い落した恰好になったのだろうか……。

室内には、飾り棚を初めとして、いろいろな場所にいろいろなものが飾られていた。日本人形、押絵の羽子板、大きなダルマ、お西^{おせい}さまの熊手、千代紙人形、それに各地の民芸品など、いずれも純日本風のものばかりで、ガンマン人形は唯一の例外である。そのせいか、これだけが畳の上に転がっているのが妙に印象的で、何となく意味ありげだった。

寝呆けまなこのブルドッグみたいだった吉田の顔に、そろそろトレッド・マークの仏頂面が浮かび上って来た。どういうものか、ヘソマガリの彼のところには、ひねくれた事件ばかりが廻って来るのだが、この人形を見ていると、今度もまた厄介なことになりそうな、すこぶる面白くない予感がする……。

吉田は、死体から切り炬燵のほうへ視線を転じた。切り

炬燵といつても、最近の例にもれず電気ヒーターを使ったもので、足を下に投げ出せるようになっていただけだが、この陽気ではもう火の気の必要はない。いまはヤグラの上にじかにデコラ張りの板が置かれていて、食卓がわりに使われている。

そのデコラ板の上には、ウイスキーの瓶が一本とアイスベル、それに汚れた空の食器がいくつも重ねて置かれていた。ウイスキーは吉田が日頃愛用している国産の安物ではなく、ガンマン好みのバーボンでもない。えげれす渡来の高級品、バレンタインの十七年ものというやつである。これを飲むのに使ったと思われるグラスが一つ、死体の足もとのあたりに転がっていた。

食器のほうは、いずれも『松月庵』という店名入りで、天井やカツ丼などの飯ものに使うドンブリが三つ、そば用の二つ、茶碗むし用らしいのが二つ、それに香のものや薬味を入れるのに使う小皿が五つ——みんな、中味はきれいに平らげられている。器の数から判断すれば、少くとも五人ぐらいがそば屋の出前を取って、いっしょに食事をした、と思われるのだが……。

「主任、汚れた箸は二膳しかありませんよ」

佐藤部長刑事が、たまげたような声で言った。なるほど、

店名入りの紙袋におさまった割り箸がいくつか、空の器のそばに置いてあるが、使われた形跡のあるのは、そのうちの二つだけだった。

「ふむ……あれだけの巨体なら、なみの人間の何倍かは食うだろうて」

うなるようにそう言ったとたん、吉田の腹の虫はグーグーと鳴り出した。晩飯はふつうに食ったはずなのだが、あんな夢を見たおかげで、すっかり食欲を刺激されてしまったらしい。おまけに、ここにはとびきり上物のウイスキーまである。眼の毒になることおびただしく、胃がキョッとしめつけられるみたいで、何ともやるせない……。

この際、ウイスキーをちょいと毒見するのは、捜査上必要なことかもしれない、と吉田は自分で自分を納得させて、瓶に手をのぼし、キャップを外した。まずは上物のウイスキーの芳香を楽しもうと、大きな鼻の穴を一杯に拡げたとたん、彼は眼を白黒させた。青酸系の毒物に特有の、アーモンドのようなにおいがただよって来たからである。

「けしからん、実にけしからん……」

吉田は大いに憤慨した。ウイスキーの瓶はまだ口をあけたばかりらしく、中味はほとんど減っていない。それに毒をぶちこんで、せっかくの舶来上等品をバーにするなん

て、まったくもって許しがたい暴挙だ。

それにしても、本当に毒見が捜査上必要なことであったとは……もつとも、被害者には外傷もなさそうだし、首をしめられた形跡もなかったから、毒殺というのは当然考えられる線だったのだが……。

2

「死因はやはり、青酸系の毒物による中毒死でしょうな。

死亡推定時刻は、およそ午後六時半から八時半の間という見当です」

死体をあらためた鑑識医が、吉田警部補に向って言った。

「もちろん、正確なところは解剖の結果を待たなければなりませんがね……まあ常識的に見て、これだけの巨漢を力づくでやつつけるのは、たとえ不意を襲うにしても、なかなか大変なことで、リスクが大きすぎるでしょうな。なみの人間なら、彼を殺そうと思えば、飛び道具か毒物を使うしか手がないんじゃないか」

「うむ、たしかにこのホトケは、ただブヨブヨ肥っているだけじゃなくて、腕の太さなんかを見ると、力もありそう

だからな……ところで、青酸系の毒物といえば、ふつうは即死だろうが、大男総身に知恵がまわりかねで、毒のまわりも少し遅いんじゃないか？」

「そいつは珍説ですな。大男だからってことはないでしょうが、ただ毒物の効き目はケース・バイ・ケースで、かなり個人差があります。口に入れてから絶命するまでに、ふつう以上に時間がかかるという場合も、もちろんあり得ますね。そういえば……被害者はこんなものを右手に握りしめていましたよ」

鑑識医が差出したのは、何とも奇妙なもので、銀色に光る、ごく小さな星形の金属片だった。それを見ると、佐藤部長刑事はたちまち眼の色を変えた。

「主任、これこそダイイング・メッセージですよ。被害者は毒を盛られたことに気がつくど、いまはの際に、犯人の正体を示す手がかりを残そうとしたんです……」

エラリー・クイーンにかぶれているわけでもなからうが、佐藤はどういうものかダイイング・メッセージが大好きで、ことあるごとにそれを持出す癖がある。だから、こんなお誂えむきの情況にぶつかれば、赤いものを見た牛みたいにいきり立つのも無理はない。

「フン……いったいこれが、どんな手がかりになるという

んだ？」

吉田はクソ面白くもないという顔である。

「犯人はホシ……いや、これは駄洒落じゃありません。犯人の名前が星野とか星山とかいうのでは……それとも……」

「それとも？ 犯人は我々の仲間、つまり警察官だともいうのかね？」

じろりと意地の悪い眼つきで佐藤を睨むと、吉田は途方もないことを言い出した。

「警察官？ どうしてまた……？」

「よく見ろ。そこに転がっているガンマン人形のチョッキの胸に、何かをむしり取ったような跡があるだろう。このブリキ片は、そこにくっついていたものに違い……つまりこの人形は、西部劇でおなじみの星形のバッジをつけた保安官なんだな。ところが、日本には保安官なんてものはない。それにいちばん近いのは、我々警察官じゃねえか」「なるほど……しかし、まさか……」

人形をつくづくと見ながら、今度は佐藤のほうが悪夢にうなされたような顔で、

「やっぱり名前でしょう。たぶん関係者を調べれば、星の字のつくやつが出て来ると思いますよ……ともかく、これがダイニング・メッセージであることは、まず間違いない

と思います。この部屋の状況と死体の位置関係を見ると、

被害者は最初、飾り棚を背にして食卓に向っていたようです。ところが毒を飲まされてから、彼は体の向きを変え、必死の努力で立上り、飾り棚のほうへ歩み寄った。そして人形を取出し、星形のバッジをむしり取ったところで息たえた……こうした行動は、犯人の手がかりを残すため、という目的以外には考えられないんじゃないか」

「フン、星野か星山か。そう都合よくことが運んだら、天井とそばを十人前ぐらいおごってやらあ。おれの手がける事件は、どうせもつれるに決つとるんだからな」

吉田は大きな溜息をつくと、近くにいた地元署の桜井という刑事に向つて、

「ところで、ホトケはこの家の主なんだろうな？」

「そうです。原島忠男という名で、浅草橋に衣料品問屋の店を持っています。ただ、さっきちょっと聞いた話では、幸子というかみさんのほうが凄腕で、商売の実権を握っているらしいんですがね……ま、そのあたりの事情については、発見者からじかにお聞きになったほうがいいでしょう」

「その発見者は？」

「二人いまして、一人は原島の店に勤めている室口清とい